

アルザス史 7 第二次大戦勃発。大エクソダス

志村 良知

フランス・パリ政府とアルザスの確執はフランスとドイツの間が風雲急を告げた時、国境地帯の無人化政策になって現れる。1939年9月、ポーランドでの第二次大戦勃発と同時に、まだ戦火など程遠かったアルザス・ロレーヌのストラスブールなど大都市を含めマジノ・ライン（フランスの対ドイツ大要塞群）の外の地域に住んでいた60万人の住民が、父祖の地を離れての南フランスへの疎開を強要された。これは当時の人口の3分の1に相当する。

フランスが直接ドイツと国境を接しているのはアルザスとロレーヌ（現ロレーヌ北部のモーゼル県）だけである。ここを無人化すれば、ドイツとの間に緩衝地帯ができる。アルザス・ロレーヌ局の廃止から15年経っても、アルザス・ロレーヌに住む人たちを完全な同胞とみなしていなかったこそその早期かつ徹底的な長距離強制疎開だった。アルザスの象徴都市ストラスブールからは人影が消えた。

追われたアルザス人は、マジノラインのすぐ内側に移るのではなく、1000キロメートルあまり離れたオクシタンと呼ばれるピレネーを望む貧しい農村地帯のフランス南西部地方に住まわされることになった。移動手段はバスと列車、携行を許可されたのは30キログラムまでの手荷物のみ、血縁も職も代替の土地もない。彼らのファミリー・ネームはドイツそのものだし、話す言葉はオクシタン（渋谷駅前に同名のおしゃれなカフェがあるが、「パリジャン」とは正反対の「プロバンス・田舎＝田舎者」の意味も持つ）には「ウイ」ではなく「ヤー」という敵国語のドイツ語にしか聞こえない。アルザス人にはプロテスタントも多く、宗教的相克もあってオクシタンたちの「ヤー・ヤーと言う連中」への偏見と差別は凄まじかった。フランス政府の生活支援も十分ではなく、アルザスでの暮らしに比べれば悲惨ともいえる生活水準、さらに故郷には、フランス本土からの兵隊が駐屯しており、残してきた財産は彼らの略奪の危険に晒されている。農民は田畑だけではなく、家畜や作物・収穫物もそのままに置き去りにしてきているのだ。

民間人の戦争犠牲を避ける為という意味では戦闘予測地域の軍民を分離して民を疎開させるのは最上の策である。沖縄戦の悲劇はこれができなかったために、満州や樺太の悲劇も国際情勢と戦局の読み誤りでこれをしなかったため起きた。しかしアルザスの場合、ドイツに

宣戦布告後とはいえ実施が極めて急で、規模が大きく距離が長く、疎開民の受け入れ体制も、無人となった地域や都市の治安維持体制も何も整っていない中でまさに泥縄で行われた。

これは、アルザス・ロレーヌ人の身の安全のためというより、フランス＝パリ政府がアルザス・ロレーヌのドイツへの寝返り＝対フランス蜂起を恐れたのだ、と言われても仕方がないであろう。しかも、あとで述べるが、住民を疎開させフランス本土からの兵隊が駐屯し、要塞兵がマジノラインに籠って守りを固めた筈のフランス軍は、ドイツ軍に対してろくに抵抗もせず5日間でアルザス・ロレーヌを引き渡してしまったのだ。小国が大国の保護下に入る時求める最大の見返り＝安全保障、さえ果たしてもらえなかったのである。

フランス領アルザスから疎開させられたアルザス人は、半年ほど経って今度はナチス・ドイツが支配する準ドイツのエルザスに帰還することとなり、帰還にはナチス基準の政治的選別が行われた。

この、まるっきり政治形態が異なってしまった故郷に帰るという事態の中で、アルザスの新しい支配者ドイツによって帰還を拒否された人のほか、ナチス・ドイツ支配下のアルザスに帰るのをよしとしない自発的非帰還者も多かった。

ドイツ本国においてのナチスによるユダヤ人迫害は既に知られていたもので、ユダヤ系の人たちは当然帰還しなかったし、ユダヤ系の住民の中にはいずれドイツはアルザス・ロレーヌに攻めてくると読んで、戦前に自発的に故郷を離れた人たちもいた。

7.第二次大戦下のドイツ化。 に続く